

今世幕府の士に朝野北水と云ふ人あり、此人の北極星の旋を考へたる説に、此星の動ある事を知ずては、諸國にて出地を測量すること能はざる者なり、其は譬へば北極出地三十度の國にて測るとき、刻により三十六度にも見え、或は三十三度餘にも見ゆる事あり、三十六度と爲れる時に見たる者は、其國を三十六度の國と定め、三十四度と爲れる時に見たる者は、三十四度として各々見たる所を以て測量し得たりと思ふ、故に其説區なり、是北辰と北極星とを一に思ふが故にて、昔の書にも北辰と北極星の差別なし篤胤云、昔の書に北辰と北極星の別なしと云へるは、誤る天樞、やがて北辰なるにて知るべし、然るを、天宣書天文志より次て、後の天文書に、此議、鹿略にたり來て、よく其差別を説著せる書なき故に、かく云へるなるべし、斯て天經或問に至りて、始めて其差別を説出せし、辰とは都て星なき所を云ふ、北辰は總天の北樞なり、樞は少も動かねど、北極星は其側に在りて小旋する故に、微動といふ、然れども天經或問に、上下に三度づ、旋ると云へり、上下三度宛は六度なれば、微動と云べからず、余積年研究して其微動の極を得たり、篤胤云、以前文と云て、門に入ざる人に其傳を傳ふる事なし、甚秘すべき事なり、其まづ北極の第一星とて、筆を止めたるが、次に是より以下の文を出せり、是謂ゆる秘説なり、第六星と第七星とを能見定めて、第一星の上にも下にも、第六星、第七星。斯の如く見ゆるは、北辰と相並びて東西するなれど、高下なし、是出地測量の刻限なり、また第一星より東の上にて、斯の如く見ゆるは、第一星高しと知べし、また、かくの如くなり、或は、かくの如くに見ゆるとも、右に准じて測るときは、第一星三十六度に見ゆるとも、實は三十五度の國なりと知べしと云り、是は實測に叶へる説なり、用ふべし、此北水と云ふ人の説は、天象話説と題、早く其門に入りて、其傳を受たると、安藤直彦が藏たる本とを合せ見て記せり、

〔仙臺實測志〕下、此二十八宿度数、則數十年來之測驗也、與古之測數不同、而有廣狹、於其宿者、假令如謂東海道北陸道、自此所之宿到于彼所之宿、有何里何町也、是以非二十八宿、則不能測驗七政之行、衆星之度矣、故二十八宿即天之準繩也、